

# アトランタのハイアット・リージェンシー

みなさんの中で「風と共に去りぬ」という映画を知らない方はさすがにいないでしょう。1939年に作られ、アカデミー賞10部門受賞という名作中の名作であるこの映画は、アメリカの南北戦争時代の南部を舞台に、ビビアン・リー演ずるスカーレット・オハラとクラーク・ゲーブル演ずるレット・バトラーの人生を描いた物語です。ビビアン・リーの女っぷりと、クラーク・ゲーブルの男っぷりだけで十分に楽しめるのに、戦争のシーンやアトランタの町の炎上シーンなどダイナミックな映像も印象的な大作です。ただ、これを映画館のフルスクリーンで見たという人は、最近少ないのではないのでしょうか。私もテレビでは何度も見たことがありますが、一度は映画館で見なきゃと思い、大学生時代に授業をさぼって、平日の新宿の映画館に足を運んだことがあります。今やレンタルビデオが充実して、このような名作を上演する映画館も少なくなりましたが、映画館の大画面で見るといいですよ。ただ観客数が27人、そのうち私以外は13組のカップルだったことが、ちいと寂しかったのですが。

さて、この映画の舞台となったのはアトランタとその近郊の架空の町タラ、原作者のマーガレット・ミッチェルがアトランタに住んでいて、この町で執筆したんです。ただし、現在のアトランタはそのころの面影の全くない現代的な都市となっていて、わずかに作家の生家やダウンタウンのはずれのレストランが、映画よりは後の時代だけど、以前のアトランタを想像させてくれます。(写真①-③)

現代都市のアトランタは、大リーグでは強豪アトランタ・ブレーブスの本拠地で、1996年にオリンピックも開催されたし、名前はよくご存じかと思いますが、町の印象はあまりないのではありませんか。実はこの町、写真のような高層ビルの現代都市というだけでなく、プレキャストコンクリートカーテンウォール(以下PCカーテンウォール)が盛んに使われている町なのです。

日本のPCカーテンウォールの多くは、タイル打込みや石打込み仕上げまたは塗装仕上げで使われることが殆どですが、アメリカでは、素地仕上げ、つまりたたきや洗出しによってコンクリートの素地を荒ら

して、石の代替品として使われることが多いのです。例えば、低層階にはグレーの石を使うが、5階からはそれに似た感じのPCカーテンウォールを使っているという建物が、いくつもあります。(写真④、⑤)工場を見に行くと、いろいろな色の骨材があり、これを使って少し色の付いたコンクリートを作り、その表面を洗出しなどで荒らしてカーテンウォールを作っているのです。

このような数多くのPCカーテンウォールでできた建物の一つに、まわりの高層ビル群に囲まれてしまって目立たなくなっているハイアット・リージェンシー・ホテルがあります。このホテルこそが、現代建築の歴史を変えたアトランタで最も重要な建物であり、現代的なアトリウム最初の建物なんです。(写真⑥、⑦)

1967年にジョン・ポートマンの設計でできたこの建物も、他のアトランタの高層ビルと同様にPCが多用されています。例えば、入り口付近の壁は洗出しパネル、外壁と外部バルコニーもPC、内部もかなりの部分でPCが使われています。(写真⑧、⑨)しかし、この建物が歴史上





# the Wind

重要なのは、なんといっても現代的なアトリウム空間を最初につくり、そこを「アトリウム」と命名したことにあります。

アトリウムという言葉は、もともと古代ローマ住宅の中庭をさす言葉なのですが、それが現在では自然光のはいる吹き抜け空間のたぐいにいろいろと使われています。これからはじめて登場したのは、このハイアット・リージェンシーでした。(写真⑩-⑫)この建物では内部の巨大な吹き抜け空間の光庭が特徴的ですが、建物を建設中にこれを何とか宣伝に使えないものかと考えるようになり、この空間に対してホテルの広報担当者が建築史上のいくつかの用語から選んで付けた名前が「アトリウム」だったのです。つまり、商業的なアピールをねらった言葉なのです。よくアトリウムの定義を聞かれることがありますが、もともとの言葉の発生を考えればこのようにあいまいなもので、私は各自で定義して自由に使ってよいものだと思います。

もちろん、このアトリウムを完成させるためにはいろいろと苦労があったようで、防災関連の対応を行い、火災の早期発見、早期消火、排煙と早期避難などの対応を丁寧に行うことにより実現できたんだそうです。その後アメリカではこの考え方を全米防災協会のコードに取り入れることにより、たくさんのアトリウムが建設されるようになりました。

日本でも1982年に新宿NSビル(設計:日建設計)が作られると、その後様々な形式の現代アトリウムが出現することとなるのです。しかし、最初の新宿NSビルでも防災関連の対応には苦労しています。つまり、アトリウムというものは防災関連の対応、特に火災関係の技術的な解決なしには、現代では作れない難しい空間であり、それを最初に生み出したハイアット・リージェンシーは、尊敬に値する建物だと言えるでしょう。

ちなみに設計者のジョン・ポートマンは、この建物で巨大なアトリウム

空間を作り、これに面したシースルーエレベーターを設置し、最上階には床が回転する展望レストランを作ったのですが、このパターンで世界中にホテルを設計しているんです。私が見たものをあげるとアトランタにも他に2つ、ニューヨークにはマリオット、サンフランシスコにはハイアットリージェンシー、アジアではシンガポールにたくさん(私の知る限り4つ)、他のアジアの都市にもいくつか作ってます。いやあ、どこに行っても同じパターンで、おおざっぱだけどスケールは大きくて、私はなんだか笑いがらつい寄ってしまって、展望レストランで飲んだりするんです。ポートマン探索も結構おもしろいですよ。後の作品ほどだんだん洗練されてくるし。でも、最初のアトランタのハイアット・リージェンシーは、PCカーテンウォールが無骨な表情を作っている作品だけど、いろいろな同様の作品を見たあとだと、当時の設計上の苦労を思い浮かべさせてくれて、これが結構いいんです。

このように、現代アトリウムのふるさととも言うべきアトランタに、数々の防災上の難点を克服してハイアット・リージェンシーは誕生したのですが、やっぱり「風と共に去りぬ」で炎上した町だから防災に厳しかったのかしら、などとくだらない感想を持ちたりしたしいです。



写真① 現在のアトランタの風景  
写真② 現在のアトランタの風景  
写真③ ダウンタウン近郊のレストラン  
写真④ PCカーテンウォールの高層ビル  
写真⑤ 石の代用品としてのPCカーテンウォール  
写真⑥ ハイアットリージェンシー外観

写真⑦ ハイアットリージェンシー外観  
写真⑧ 入り口付近の洗出しPCパネル  
写真⑨ PCの外部バルコニー  
写真⑩ トップライトのあるアトリウム  
写真⑪ アトリウム見おろし  
写真⑫ アトリウムとシースルーエレベーター